



警告のニューズレター「角笛」

発行日: 2015年10月発行 (第66号)

発行: 警告の角笛出版

価格: フリーペーパー

角笛 HP: <http://www.geocities.co.jp/Technopolis-Mars/5614/>

【目次】

◎巻頭メッセージ: 「自分の目で見ろ」 エレミヤ

◎証: 「『ヤロブアム』という人物を通して聖書が語っていること」 E3

◎お知らせコーナー: 「本の紹介」「日曜礼拝&HPのご案内」

[巻頭メッセージ] 「自分の目で見ろ」 by エレミヤ

〔聖書箇所〕ルカの福音書 12:56,57

12:56 偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。

12:57 また、なぜ自分から進んで(KJV:自分自身で)、何が正しいかを判断しないのですか。

今回は、「自分の目で見ろ」という題でメッセージをしたいと思います。自分の目で見ろ習慣がないと、おかしいガセネタ教理を掴んでしまう、ということを見ていきたいと思うのです。

主は冒頭のテキストで、群衆に対して、「**自分自身で何が正しいのかを判断しない**」ことを指摘し、叱責されました。また、「**地や空の現象を見分けることを知りながら、この時代を見分けることができない**」ことを叱責されたのです。

群衆が適切に見分けられなかったその時代、主のおられた時代とは、実際はどのような時代だったのでしょうか？以下のことばから理出来るでしょうか。

〔聖書箇所〕マタイの福音書 16:4

16:4 邪悪で不義な時代は、しるしを求める。しかし、ヨナのしるしのほかには、なんのしるしも与えられないであろう。そして、イエスは彼らをあとに残して立ち去られた。(口語訳)

〔聖書箇所〕マルコの福音書 8:38

8:38 邪悪で罪深いこの時代にあつて、わたしとわたしの言葉とを恥じる者に対しては、人の子もまた、父の栄光のうちに聖なる御使たちと共に来るときに、その者を恥じるであろう。(口語訳)

これらのことばから理解出来ますように、この時代は神の目、主イエスの目には邪悪な時代だったのです。そして事実、この時代は邪悪であり、神から遣わされた神のひとり子であるイエスさえ受け入れず、逆に彼を異端者、罪人として告発し、十字架の上で命を奪ったのです。そしてその彼らの邪悪さ、犯した罪に対して凄まじい神の怒りが燃え上がり、その怒りの中で西暦70年にエルサレムはローマの手に渡され、この都にいたユダヤ人たちは一人残さず命を奪われ、殺されました。

自分の目で見ると エレミヤ

このような事実を見ても、この主イエスのおられた時代は悪い時代であり、罪が増し加わり、神の前に邪悪な時代となり、今にも神の怒りが降り注ぐか、という曲がった時代だったのです。しかしどうもこの当時の群衆はそのことには気付いていない、自分たちの時代が邪悪だとも、神の怒りを買いつつあることも全く知らなかった、理解していなかったように思えます。

逆に自分たちは神に愛され、祝福される世代である、益々神の愛と祝福がこの時代に注がれる、などと思っていたのかも知れません。誤解していたのかも知れません。だからこそ主は、「偽善者たち。あなたがたは地や空の現象を見分けることを知りながら、どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。」と語り、叱責したのです。

さて、このように実際のこの時代の状況と群衆の悟りや理解とは異なっていたわけです。そしてそのように間違えた時代理解や誤解と関係して主は、「また、なぜ自分から進んで(KJV:自分自身で)、何が正しいかを判断しないのですか。」と語られたことを見てください。

このことばの言わんとしていること、背景は何でしょうか？それはその当時の群衆が、自分自身でその時代を見分けたり、何が正しいかを判断してはいなかった、逆に指導者であるパリサイ人や律法学者たちのことばを鵜呑みにしていた、それゆえに正しくその時代を見分けられなかった、そう理解出来るのです。

指導者であるパリサイ人たち自身が、その時代を見分けられず、甘いことばや祝福や恵みを群衆に述べており、逆にこの邪悪な時代に対して神の怒りが積み上がっていることなど決して述べなかったのでしょう。それで群衆もそれらのことばを鵜呑みにして、実際と異なる時代理解をし、誤った判断をしてしまった、そう理解出来るのです。

そしてそのような群衆の誤りと関連して、「自分自身で判断しない」こと、すべての判断を他人任せ、指導者任せにしていることが問題である、と主は指摘しておられるわけなのです。しかしその当時の民の指導者は神の前に盲目でした。主は盲目なパリサイ人たちに関してこう述べています。

〔聖書箇所〕マタイの福音書 15:14

15:14 彼らのことは放っておきなさい。彼らは盲人を手引きする盲人です。もし、盲人が盲人を手引きするなら、ふたりとも穴に落ち込むのです。」

さて、このこと、「自分自身で判断しない、判断を他人任せにしている」ゆえに真理が見えないことをじつは聖書は度々指摘しています。以下はそのひとつです。

〔聖書箇所〕イザヤ書 6:9

6:9 すると仰せられた。「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』」



同性婚を祝福する牧師:背教は進む

自分の目で見ると エレミヤ

〔聖書箇所〕イザヤ書 6:10

6:10 この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り、立ち返って、いやされることのないために。」

ここでは、「**自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟り立ち返って、いやされることのないために。**」と書かれています。裏返して言うと、群衆も、もし自分の目で見、自分の耳で聞き、自分の心で悟るなら現状を正しく判断し、悟り、主の前に立ち返り、いやされるようになったのでしょうか。それなのに彼らはパリサイ人など指導者の甘いことば、おためごかしのことばを鵜呑みにし、正しい自分の状態を理解出来ませんでした。そのため、彼らは神に立ち返ることも、その結果、いやされることも経験しない、このみことばはそう語っているのです。

すなわち聖書で言う自分自身で判断する、自分の目で見、自分の耳で聞く、自分の心で悟るなどの表現の裏には間違えた指導者、間違えたリーダー、目の見えない指導者の存在があり、彼らの判断や教理を鵜呑みにする群衆の姿があるのです。

そしてこのイザヤ書の箇所は、新約聖書の中で何度か引用されています。ですので、聖書を書かれた神はこのこと、自分の目で見、耳で聞くことを強調されていることが分かります。すなわち、いくら教会の指導者の言うことばでも吟味も無く、鵜呑みにすべきではない、と強調されていることが分かるのです。

さて、このこと、自分の目で見ず、耳で聞かず、大事な判断を指導者に任せたために永遠の命を失うような誤りに入る例は、キリスト教会の中でもよくある事柄です。たとえばローマ・カトリック教会です。ローマ・カトリック教会では、マリヤ像を盛んに拝み、偶像礼拝を行います。さらにキリストへ捧げられるべき祈りをマリヤへ捧げ、キリスト教だ

か、マリヤ教だか、よく分からないものになっています。この教会では、ただの田舎女に過ぎなかったマリヤを異常に高め、無原罪、昇天、さらにキリストと共同の贖い主にまで高めています。そしてカトリックの信者は皆、それらのおかしな教理を信じ、受け入れています。なぜ、彼らはこのような聖書とかけ離れた異端教理を受け入れているのでしょうか？その理由は彼ら、カトリック教徒がローマ法皇を始めとした指導者の語るおかしな教理、ヨタ話を鵜呑みにしているからなのです。

そして彼らカトリック教徒は、自分自身の目で聖書を読もうとせず、自分自身で祈り、聖霊の声を聞こうとしないからなのです。もし、彼らが自分自身の目で聖書を読む習慣を持ち、自分自身で聖書のみことばを悟ろうと努めるなら、キリストご自身が決してマリヤには特別な位置を置いていないことに気付くでしょう。マリヤが無原罪である、昇天した、キリストと共同の贖い主である、などと聖書は決して述べていないことを見るでしょう。彼らは自分の目で見ず、耳で聞かないために、これらの誤りから出てくることが出来ないのです。

同じことはあの異端教団、ものみの塔にも言えるかも知れません。彼らは繰り返し、繰り返し、ものみの塔独自のテキストに基づいて学びを受けます。彼らの教理に沿って改ざんされた聖書、新世界訳に従い、キリストは神でないとの教理を繰り返し叩き込まれます。いわば洗脳を受けるわけです。そしてどの信者も代わり映えのしない、金太郎飴みたいな同じ論法で、「このように聖書はキリストが神でないことを語っている」と語るわけです。

彼らの語る教理の中のひとつとして、自分の目で聖書を見、自分の耳で神から聞いた教理などありません。もし、彼らが自分の目で聖書を読めばキリストがどのような方であるか分かり、神御自身であることが理解出来ると思うのですが、彼らは自分の目で聖書を見ず、自分の耳で神に聞こうとはしないのです。

自分の目で見ると エレミヤ

その結果、自らこの異端教理の罠から逃れることが出来ません。

さて、私はプロテスタントのクリスチャンなので、プロテスタントの教会について述べたいと思うのです。私の理解では、プロテスタントの人々も同じような間違いに入っており、聖書を自分の目で見ず、結果として指導者の誤った教理に気付かず、同じ誤りに入っていると思えます。

プロテスタントの人々も自分の目で聖書を読まず、逆に教会の指導者や牧師、教師の言うことをただ鵜呑みにするため、いくつかの誤りの教理に入っています。その誤りの教理の最たるものは、いわゆる艱難前携挙説、二段階携挙説です。

この教えは艱難の前にキリストがやって来て携挙して下さる、艱難に会わない、という結構毛だらけな教理です。しかし自分の目で聖書を読むならこの教理の矛盾に大いに気付きます。聖書を読むならキリスト御自身がその日、正しいクリスチャンは艱難に会うことを繰り返し語っていることに気付くからなのです。以下の通りです。

[聖書箇所]マタイの福音書 24:8-10,13,20-22

24:8 しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。

24:9 そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。

24:10 また、そのときは、人々が大ぜいつまずき、互いに裏切り、憎み合います。

24:13 しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

24:20 ただ、あなたがたの逃げるのが、冬や安息日にならぬよう祈りなさい。

24:21 そのときには、世の初めから、今に至るまで、いまだかつてなかったような、またこれからもないような、ひどい苦難があるからです。

24:22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。

これらのマタイの福音書24章のキリストのことばを読んで分かることは、キリスト御自身は「艱難は来るが、その前に挙げられる」などとは決して一言も述べていないことです。逆に主はその日、正しいクリスチャンが艱難に会うことを前提としたかのように、**「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」**と艱難に耐え忍ぶことを述べられたのです。

ですので、私たちが「自分の目」で聖書を読むなら艱難の前に挙げられる、などとの教理は全く非聖書的な教理であることが分かるのです。

さて、もうひとつのことを申し上げたいと思います。それは今の時代、現代はどのような時代なのかを見分ける、ということです。前述のように主はその時代の群衆に対して、**「どうして今のこの時代を見分けることができないのですか。」**と述べました。

すなわち、当時の群衆たちの時代認識が誤っており、霊的な認識が誤っていることを語られたのです。

彼らは、今にも神の怒りが炸裂するかという深刻な背教の時代に住んでいながら、その深刻さを理解せず、その時代に対して憂えることも悔い改めることも無かった、そう言われているように思えます。

そして正しく自分たちの時代を見分けることの出来なかったエルサレムの群衆たちは、さらに罪を重ね、神のひとり子イエスを殺し、結果神の怒りの中で滅んでいったのです。このことと関連して、主はさらに、**「また、なぜ自分から進んで(KJV:自分自身で)、何が正しいかを判断しないのですか。」**と語られました。

自分の目で見ると エレミヤ

彼ら群衆は自分たちの指導者の言うおためごかしのことばや甘い聴衆受けするようなメッセージを鵜呑みにし、この時代を正しく悟ることが出来なかったことが想像出来るのです。さて、このことは主イエスのおられた時代に関することです。

それでは今の時代に関してはどうでしょうか？プロテスタントのクリスチャンは、今の時代を正しく見分けているのでしょうか？今はどのような時代でしょうか？

現在、アメリカにおいては同性愛を受け入れる教会も多くなり、同性愛者を牧師として迎え入れる教会も出てきています。聖書に書かれた同性愛を禁止することばはないがしろにされています。さらに妊娠した赤ん坊の中絶を正しいとする教会も出てきています。聖書の殺すなかれ、とのことばもないがしろにされているのです。これらを見ると、まさに教会がソドムやエジプトのようになっており、神の怒りが今にも注がれるか、という時代に我々はいるように思えます。

しかしそのような危機感を持っているクリスチャンはあまり存在しないように思えます。誰一人、教会が裁かれる時が来る、クリスチャンが裁かれる時が来るなどと心配していないように思えます。そしてその理由は、彼らが教会の指導者や牧師、教師のことばを盲信し、自分の目で聖書を読まず、自分の心で悟ろうとしないからなのです。

しかし私たちが誤った教師の終末教理から離れ、自分の目で聖書を読み、自分の目で今の時代を判断するなら、今は教会に対して神の怒りが積み上げられている時代であることを悟るようになるでしょう。主はその再臨に関して、以下のように述べられました。

〔聖書箇所〕マタイの福音書 24:30

24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、

人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

この箇所を通して語られていることは、主の再臨の日が全てのクリスチャンにとって幸いの日、祝福の日となる、ということではなく、逆にこの世につき、地につき、この世の論理に従い、同性愛を受け入れたり、胎児の中絶に賛同したりする地につくクリスチャンにとり、その再臨の日は悲しみの日、災いの日となる、ということなのです。

主の再臨の日に全てのクリスチャンが花嫁として迎え入れられるわけではありません。逆に聖書はその日、主の花嫁として迎え入れられる賢い娘と共に、受け入れられない愚かな娘が存在することを述べるのです。（マタイの福音書 25章1節～13節）再臨の日には、クリスチャンの間に区分があることを語るのです。

私たちは今の時代の誤った終末教理を鵜呑みにせず、逆に自分自身の目で聖書のことばを見、自分自身の耳で聖霊のことばを聞き分けることを学ぶ必要があることを知しましょう。



賢い娘、愚かな娘

『ヤロブアム』という人物を通して聖書が語っていること E3

今回も土曜日の弟子の集会のおすすめで学んだことについて話したいと思います。旧約聖書に「ヤロブアム」という人物が登場します。聖書を読んでいるクリスチャンなら、それとなく聞いた名前だと思います。けれども私個人は、レムナントキリスト教会へ行く以前は、もう、旧約時代の人なのだから今のクリスチャンとは関係が無いのでは？と思っていました。しかし礼拝のメッセージや土曜日のおすすめを通して、今の時代を生きる私たちクリスチャンとも多少なりとも関係がありますし、知っておいたほうが良いのでは？と思いましたので、お話をさせていただきたいと思います。もし、多少なりとも興味をお持ちでしたら、ぜひお読みいただくと幸いです。以下、エレミヤ牧師によるメッセージです。

みことばを見る前に少し話をさせてください。旧約のイスラエルに起きた歴史は、新約の教会に再現すると思われます。つまり繰り返されるのでは？と思われるのです。そして旧約の学びは、新約時代の教会の歴史を学ぶことに通じます。たとえば映画にもありますように、“Back to the future”ということばがあります。これは「未来に戻る」という意味です。しかし私たちが未来を見たいという場合は、反対に過去に戻り、旧約聖書を学びます。そして今回登場する「ヤロブアム」を知ることは、未来に何が起きるかを知ることとなります。ダビデの時代、イスラエルは12部族でした。ソロモンの時もそうでした。けれどもソロモンの子であるレハブアム王の時に分裂して、北のイスラエルと南のユダに分かれました。これはそのまま新約の教会においても言えるのでは？と思います。新約時代も北のイスラエル、すなわちカトリックと、南のユダ、すなわちプロテスタントに分かれています。また、ヤロブアム&レハブアムにも意味があります。ヤロブアムはカトリックの最初の王です。ゆえにカトリックのあらゆる問題を理解するキーとなります。そしてあらゆるカトリックの災いは、ヤロブアムを通して起きました。また、ヤロブアム&レハブアムにも意味合いがあって、「沢山の民」という意味があります。つまりカトリックの多くの民のはじめがヤロブアムで、プロテスタントの多くの民のはじめがレハブアムということになります。そしてヤロブアム&レハブアムの時に、キリスト教会が大きく二つに分かれました。ゆえにヤロブアムを見ていくことは、カトリックの問題点を理解する鍵となるのでは？と思います。では、これからみことばに沿ってヤロブアムの問題点について見ていきたいと思います。聖書箇所はⅡ歴代誌11章です。

11:5 レハブアムはエルサレムに住み、ユダの中に防備の町々を建てた。

レハブアムは御心の中心(ユダ)の王です。そしてユダにこそ、ダビデ王朝の正統な末裔があります。王であるキリストの正統な継承者なのです。ゆえにヤロブアムには御心が無いことが分かります。そういう意味で、このことばはプロテスタントの働きについての預言とも言えます。

11:11 さらに、彼は防備を固めて、その中に隊長を置き、

糧食、油、ぶどう酒をたくわえた。

「糧食、油、ぶどう酒」とは、みことばのパンや聖霊の油を指すたとえです。ゆえにレハブアム(ユダ)を通して、聖霊の働きが進んだことを言われています。

11:12 またすべての町ごとに大盾と槍を置き、これらの町をますます強固にした。こうして、ユダとベニヤミンは彼の側についた。

「槍」はみことばとか教理のたとえですので、「すべての町ごとに大盾と槍を置き、これらの町をますます強固にした。」とは、教理的にも強くなった、ということ言われています。

11:13 イスラエル全土の祭司たち、レビ人たちは、あらゆる地域から出て来て、彼の側についた。

11:14 実は、レビ人は自分たちの放牧地と所有地を捨てて、ユダとエルサレムに来たのである。ヤロブアムとその子らが、主の祭司としての彼らの職を解き、

「イスラエル全土の祭司たち、レビ人たち」ということばに語りかけがあります。レビ人はどこに住むか？と言うと、各部族に分かれて住んでいます。「レビ人」とは、今で言えば牧師や神父のことです。そしてレビ人はどこにでも入っていきます。そういった意味合いで、北イスラエル(カトリック)にもレビ人はいるのです。ゆえに、「イスラエル全土の祭司たち、レビ人たちは、あらゆる地域から出て来て、彼の側についた。」とは、牧師(神父)が任命地を捨ててプロテスタントに来た、ということ言われています。そしてそれが正しいのです。つまりカトリックを離れて、教会も信者も捨ててプロテスタントに来た、ということ言っています。ちなみに「レビ人」とは、「くつつく」という意味です。ゆえにプロテスタントに御心があります。原点はプロテスタントにある、ということです。ですから信徒の数の多いカトリックではありませんが、本来はプロテスタントに御心があるので、こちらで主に仕えていく、ということ言われています。

11:14 実は、レビ人は自分たちの放牧地と所有地を捨てて、ユダとエルサレムに来たのである。ヤロブアムとその子らが、主の祭司としての彼らの職を解き、

11:15 自分のために祭司たちを任命して、彼が造った高き所と雄やぎと子牛に仕えさせたからである。

ここでヤロブアムが勝手なことをしています。「子牛に仕えさせた」とありますように、「子牛」を作ったことが問題です。このことに神からの御心はありません。「子牛」とか「やぎ」はひとつの型です。「牛」や「やぎ」は「クリスチャン」のたとえです。つまり「子牛に仕えさせた」とは、偶像崇拜の型を言っています。カトリックの明らかな特徴は、人間を神として拝んでいることです。たとえば法皇やマザー・テレサや聖

『ヤロブアム』という人物を通して聖書が語っていること E3

人を崇拜していることがまさしくそうです。そしてカトリックは異常な「子牛礼拝」をしています。こういうこと、つまりカトリックの問題点が旧約聖書には明確に書かれています。引き続き、Ⅱ歴代誌13章を学びましょう。

13:3 アビヤは精鋭四十万の勇敢な戦士の部隊を率いて戦争を始めた。一方、ヤロブアムも八十万の精鋭、勇士を率いて彼に対抗し、戦いの備えをした。

13:4 アビヤはエフライムの山地にあるツェマライム山の頂上に立って、言った。「ヤロブアムおよび全イスラエルよ。私の言うことを聞け。

13:5 イスラエルの神、主が、イスラエルの王国をとこしえにダビデに与えられたこと、すなわち、塩の契約をもって、彼とその子らとに与えられたことは、あなたがたが知らないはずはあるまい。

イスラエルの王国は、ダビデとその子らに与えられました。ゆえに人数は多くても、ヤロブアムは正統な王ではない、ということが理解できます。そして今もカトリックのほうで、プロテスタントに比べて人数が多いことはたしかです。でも、神はイスラエルの王国(キリスト教会)をキリストの血縁であるクリスチャンに与えられています。ゆえにカトリックはキリストとの血縁関係が無い、ということが言えると思います。

13:6 ところが、ダビデの子ソロモンのしもべであったネバテの子ヤロブアムが立ち上がって、自分の主君に反逆したが、

しかもヤロブアムはソロモン(聖霊)に反逆しました。ゆえにヤロブアムが作った国は、聖霊に反逆して作られた国だと言えると思います。失礼を承知の上で申し上げるなら、カトリックにはあまり聖霊の働きが無いのでは？と思います。たとえば血を流すマリヤがその一例です。

13:8 そこで今、あなたがたは、ダビデの子らの支配下にある主の王国に敵対して、力を増し加えようとしており、また、あなたがたはおびたしい群れをなしており、ヤロブアムが造ってあなたがたのために神とした金の子牛もあなたがたとともにある。

「主の王国」とは、南のユダ、プロテスタントのことです。カトリックはプロテスタントに対抗した王国です。そしてプロテスタントを攻撃したり、やっつけたりします。ちなみに歴史的にカトリックに多くのプロテスタントの人が殺されたという事件があります。また、カトリックのひとつの特徴は、人数が多いことです。そしてそれは恐らくこの世についているゆえに、受け入れる人が多いのでは？と思われます。また、偶像崇拜&器崇拜とカトリックは切り離せない、というのも一面の事実です。

13:9 あなたがたは、アロンの子らである主の祭司たちとレ

ビ人を追放し、諸国の民にならって自分たちのために祭司を任命したではないか。だれでも若い雄牛一頭と雄羊七頭を携えて来て祭司職につこうとする者は、神ならぬものの祭司となったのである。

カトリックの祭司、神父の問題点は、「あなたがたは、アロンの子らである主の祭司たちとレビ人を追放し、諸国の民にならって自分たちのために祭司を任命した」とありますように、レビ人ではない、ということです。本当はレビ人以外、神に仕えてはいけません。けれどもヤロブアムの祭司はレビ人ではありません。そしてカトリックの祭司は神に仕えようとしていません。ローマ法皇や教会に仕えています。法皇が「地獄は無い」と語るなら、その教えについて行っています。神ならぬものに仕えているので、真の神に至っていないのです。神に達していない教えが、カトリックの特徴です。

13:10 しかし、私たちの場合は、主が私たちの神である。私たちはこの方を捨てなかった。また、アロンの子らである祭司たちが主に仕えており、レビ人が仕事をしている。

プロテスタントの存在価値は、レビ人が仕えている、神を主としている、ということです。

13:11 彼らは朝ごとに夕ごとに全焼のいけにえを主にささげ、かおりの高い香をたき、並べ供えたパンを純金の机の上に整え、金の燭台とその上のともしび皿には、夕ごとに火をともしている。私たちは、私たちの神、主の戒めを守っている。それに反し、あなたがたはこの方を捨て去った。

「それに反し、あなたがたはこの方を捨て去った。」とありますように、カトリックは神を捨て去っている、ということです。

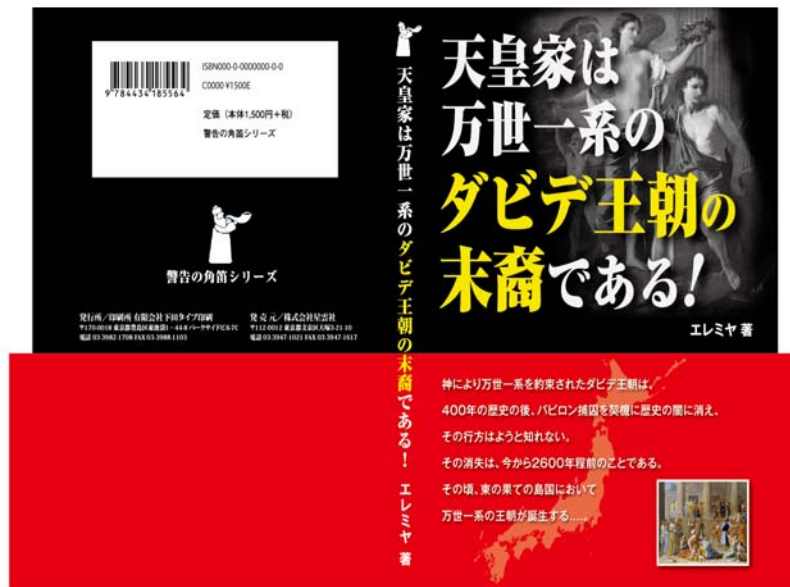
以上のことをエレミヤ牧師がメッセージされていたのですが、「ヤロブアム」を通しての語りかけについて多少なりともご理解いただけましたでしょうか？かつての私もそうだったのですが、もしかすると多くのプロテスタントのクリスチャンがカトリックの現状や問題点について知らない方が案外多いのでは？と思いますが、これらの記述は新約の終末の預言でもありますので、余計なお世話だと思いつつもよろしければぜひ、知っていただきたいと思ひまして紹介させていただきます。いつも大切なことを語ってくださる神さまに感謝します。



血を流すマリヤ像

お知らせコーナー

●エレミヤの新刊「天皇家は万世一系のダビデ王朝の末裔である！」



定価:¥1,500+消費税 ※注文を御希望の方は、以下へご連絡下さい。

警告の角笛出版 tel:042-364-2327 fax:020-4623-5255

mail:truth216@nifty.com

●レムナントキリスト教会「日曜礼拝」のご案内

曜日/時間:毎週日曜日 午前 10:30-12:30

午後 14:00-16:00

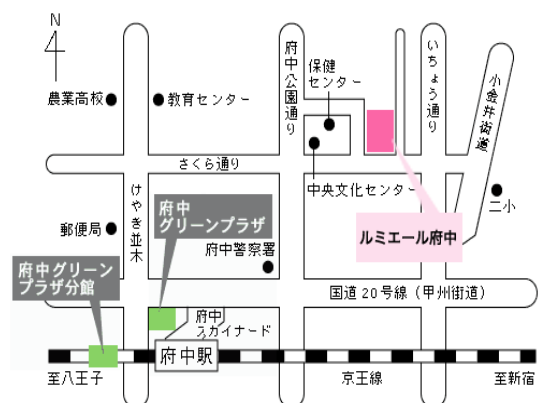
場所:東京都京王線府中駅前、府中グリーンプラザ本館

(tel:042-360-3311)

1Fのエレベーター脇の部屋表示板で、

「レムナントキリスト教会」の部屋をご確認ください。

どなたでも来会歓迎、入場無料です。



礼拝場所のURL: http://www.fuchu-cpf.or.jp/green/access/map_02.html

★教会のHPもあります。

ご興味のある方は、“Yahoo! Japan”で、「府中 レムナントキリスト教会」で検索ください。

尚、レムナントキリスト教会はプロテスタントの教会です。ものみの塔や統一教会とは関係ありません。

☆クリスチャンの方におすすめのサイト:エレミヤの部屋

<http://www.geocities.co.jp/Technopolis/6810/>

☆クリスチャンになったばかりの方やノンクリスチャンの方におすすめのサイト:オリーブ&ミルトス

<http://remnantnotudoi.jimdo.com/>